

2008 Autumn VOL.59



アイの四季だより

アイセレモニー株式会社

本社/営業本部・智の会・相談室・花環工房
飯綱町黒川2415(飯綱ホールとなり)
☎026-253-1377 FAX253-1378

フリーダイヤル ☎0120-796-311

- アイセレモニー飯綱ホール(飯綱町黒川)
- アイセレモニー五岳ホール(信濃町古間)

アイの四季だより 発行・責任者/丸山哲一

中国で栽培され、わが国へは奈良時代に、桃山時代から徳川時代にかけて観賞用の鉢植ギクとして独特の発達をしてきた。一方、ヨーロッパやアメリカに渡ったキクは切り花用に改良され、ふたたびわが国へ入ってきて洋ギクとして多量に栽培されている。切り花ギクは開花時期により夏ギク・秋ギク・寒ギクに分けられ、一年中花を見ることが出来る。キク



秋といえば―食欲の秋・実りの秋・読書の秋…

でも今年

げいげいの秋が似合う

劇団屋本舗

ある時、子育て中の友人が「毎日仕事に子育てに追われて心から笑ったことがない」と。心から笑ったことがないにシヨク。だったらほんのひと時、たかが30分でも何もかも忘れてただ楽しめるような、ほかほかしいことに笑ってしまうような、そんな時間を提供したいと思いついて、地元の知り合いを誘惑して芸術屋を立ち上げたのが飯綱東高原に棲息(ツツ間違えた)在住する倉地裕子さん。今から九年前のこと。

小劇団でなく劇団にこだわるキツカケはここから来て、地元の素晴らしいメンバーが結集。会社の社長さん、役所勤めの公務員、JR(いまはポツポツやさんと言わない)勤務に表具師さん。そして農業を営む自称富豪家?の奥さまなど。まさに笑劇団にふさわしい顔触れ。



倉地さんのこの細腕繁盛記?アツまた間違えた……このただの細腕でこのツツモノどもを率いて作・演出・公演に迫り着く。深夜に及ぶお稽古(練習)は赤鬼の如くムチを手にしてシゴクのかと思いきや、和気あいあいと楽しみながらで……(期待はずれ)

『王様の耳はロバの耳』トコヤを呼んでふさふさとした髪を刈らせる王様。すると耳はロバの耳。慌てふためいておろおろするトコヤに向けて「このことは誰にも言うでないぞ」と気の弱い王様は悲しげに。豪快に笑って喜んでいた王様は急にメソメソ。この王様の役はツチクラ住建社長さん迫真の演技。



みなさん昼間は各職場の企業戦士として激しく働いて、くつたくたです。「ノルマ」と言うムチに追い立てられて。その反動(リアクション)で、せめて舞台ではその役柄に成り切って生の自分を取り戻したい。だから深夜のお稽古が楽しいこと。この時はかりは団員の皆さん元気いっぱい、生き生きしています。

普段見馴れている品行方正な土倉さんの印象とはまったく別人のやんちゃな王様に扮して。「いや、扮してなんか居ないよ。これがボク自身よ、地味でいけるから楽しいよ」。「昼間は社長らしく演じているから、疲れてしんどいよ。トホホ……」

夜の8時から練習始まる。昼間お勤めの顔と違って嬉しそう……

豊野町浅野の正見寺へ。本堂で御参り。静かに曲が流れる。『千の風』になって。私のお墓の前で泣かないでください。そこに私はいません。眠ってなんかないよ。千の風。千の風になって。あの大きな空を吹きわたっています。(後略)



正見寺のご住職は『千の風』にたいへんなご執心。すべて買い揃えて、さらに『千の風・日本酒』も。封を切らず、大切に持っていて、たぶん飲みたいのをじっと我慢している様子。先立つた大切なあの人、今は大悲の風となり、ナモアミダブツの声となつて私を、あなたを呼び続けています。親鸞聖人の「しかれば、弥陀如来は如より来生して、報・応・化、種々の身を示し現じたまふなり」に重ねて、正見寺ご住職の思い入れが、じゅんと胸に伝わってきます。

「また観たいと思ってくれものを提供し続けるのが芸術屋の使命でありプライドであり責任である」。「そこに中途半端な事はできないぞ」という気持ちから練習の真剣さに繋がっていく」と。「毎回真剣勝負」倉地さん人生夢の挑戦はエンドレス。

お問い合わせ
笑劇団芸術屋本舗
代表 倉地裕子
飯綱町 飯綱東高原
TEL 026-253-4353
携帯 090-4460-5053

アイセレモニー飯綱ホール五岳ホール
パンフレット

お届け中! デ〜ス

文人との関わり 深い寺

浄土真宗本願寺派

古跡山 正見寺

豊野町浅野

シリーズ名刹をたずねて

うちの寺をいつ紹介してくれるのとお声が多く寄せられていました。正見寺は飯山線信濃浅野駅からほど近く、お檀家は地元豊野町は無論のこと飯綱町・信濃町にも多く、北信一帯に広がっています。ですからご住職のお忙しいおつとめの間を縫ってこの度やっとお目通り叶い、お檀家さまのリクエストにお応えすることができました。



開闢(かいびやく) 五百年の名刹

寺歴によると創建は文明五年(室町時代・四七三)、武田家の臣窪小弥太正兼が蓮如上人の教化によって出家、寺を開いたと伝えられています。現在の本堂は今から二五〇年前の宝暦九年(江戸時代・一七五九)に一段高い現在の地へ移して再建。足かけ七年、延べ五九五三人の手によって完成し、昭和五五年に京都奥谷組により力や葺き寄せ棟屋根から銅板葺きの大入母屋に改修。伽藍(本堂)の太い柱といい、造作の趣に二五〇年の歴史の重さがずつしりと感じられます。



川島芳子と正見寺

波瀾万丈の生涯を戦争と運命を遂げた悲劇の王女、男装の麗人。川島芳子が昭和初年頃、黒姫の川島浪速の山荘から飯山正受庵へ禅研究に訪庵の途中、信濃浅野駅で下車し正見寺を訪れた。

正見寺住職三男教順少年(当時長野中学生徒)の弾くマンドリン(月の砂漠)の旋律にひかれ幾日か投留。川島芳子本名「愛新覺羅顯玕」。中国清王朝康熙第十四王女として一九〇七年北京で生まれた。五才の時辛亥革命で清朝が崩壊(一九一一)、親王府一族は北京を脱出して旅順の

日本租界に亡命。(一九二二中華民国成立)

親王府総理であった長野県出身の川島浪速氏の養女となる。日本敗戦によりスパイ容疑で捕われの身となり一九四八年(昭和二十三年)北京で処刑となった。昭和史の一視点として伝縁による正見寺境内に鎮魂碑が建立され「辞世の詩」が刻まれている。

家あれども帰り得ず
涙あれども語り得ず
法あれども正しきを得ず
冤あれども誰にか訴へん

川島芳子

▲川島芳子「辞世の詩」鎮魂碑



小林一茶と正見寺

文化四年(一八〇七)七月、一茶は弟と父の遺産相続の件で江戸から帰郷。その際、正見寺住職窪弘鑑(くぼくがい)と親しくなり、それ以来正見寺は一茶の定宿となった。

したがって当寺で読まれた俳句、書簡など数多く残っており大切に保管されている。境内に一茶句碑あり。



正見寺第十八代住職 窪智招
長野市豊野町浅野六七一
電話〇二六・二五七・二五九二



▲荘厳な本堂 案な中高イスが備えられて



▲本堂から鐘樓へ連なる境内の景観



▲サルズベリ・ドウダンツツジ樹齢250年とカ

わが社自慢の新人ご紹介

古里隆浩



苗字「ふるさと」は出来すぎ、でも芸名ではなく真正正銘の本名。まず知名度が第一であるから、覚えやすくして特に仕事の上ではトクだね。

実家は隣り村の岐阜県飛騨高山。勤めの関係で転勤し、信濃町に移り住み数々の仕事を体験してきたので知人友人が多いのもこのひとの心得。

すでに信濃町が古里氏の「ふるさと」であると言う。

葬儀専門会社、アイセレモニー株式会社に入社してまだ二・三ヶ月。「いや、考えていた以上に重みを感じます。氣遣いがいかに大切かを」

入社の際には、「この地で大勢の皆さまにお世話になって、育てていただいた。その恩返しに、人様お役に立つこと」と。

そして「まだ未熟者だが担当を勤めさせていたでいて、ご遺族の方からよるこんでいただけ感謝されて」「この時、疲れが一気にふっ飛んで人様に役に立つことが出来た」と。

謙虚で努力家のふるさとくんです。どうかよろしく、応援してください。

つて自分勝手なことをしがちな人への戒め。孔子の言葉。



中国名言集 PART II

百里を行くは 九十を半ばとす

百里の遠路を行く時には、九十里に達して始めて半分来たのだと思うのが至当。

何ごととも終わりの方が難しいから、目標の九十%に達した時、やっと半分だと思つて努力すれば達成まぢがいなし。

古きを尋ねて 新しきを知る

昔の事蹟や先人の学問の事蹟などを繰り返し研究して、その中に含まれる価値や意義を見つけ出し、それに現代的な評価を加えて、実際に生かすこと。

古い習慣にとらわれたいと言

衣食足りて 礼節を知る

生活にゆとりができれば、おのずと公徳心が高まり、礼儀・節操もよくなる。

しかし、衣食足りて暖衣飽食しぬくめくと着て、腹いっぱい食べる満ち足りた暮らしの現代。生活が豊かになればなるほど、礼節乱れがち。

あなたのことかな、もしかして…

株を守りて 兔を守りて

いたずらに旧習を守つて、状況変化に対応しないこと。融通のきかないことのとえ。

農夫が畑を耕していたとき、一匹の兎が走つてきて、木の切り株に頭をぶつけて死んだ。農夫はそれ以来仕事をやめ、その株を見守つて兎がぶつかるのを待ち続けた。

が、兎は二度と得られず、柳の下にいつともどじょうはいないというところ。「果報は、寝て待ってては来ない」寝て待って…の対語である。